

## 詩人の妄執

### ―佐藤義清遁世考（下）―

松原輝美

#### 六

私見では、それは空仁を「法輪」に訪ねた、その後のことと思われる頃に、西行に次の一首がある。

いざさらば盛り思ふも程もあらしはこや魏姑射が峯の花に睦れし

『山家集』の末尾近く、下巻におさめられた、花十首、郭公十首、月十首とはじまる「百首歌」のうちの述べ懐十首のうちの第一首である。

西行の「百首歌」のうち完全な姿を伝えた、これは唯一のものであり、それらは出家前の作と見えて、その歌柄に於いて稚いものである、というのが、大方の先学の一致した見解である。それが、稚い歌柄のそれだけに、当時の義清の心意はよくみえるのではないか。

『魏姑射が峯』は鳥羽上皇の仙洞御所をいう。『盛り』は花の盛り。今まで仙洞の花に馴染んで来たが、その花の盛りを思うのももう暫ら

くのことである、自分は間もなく出家するのだから」と『大系』は注している。

下の句は、第二、三句に反転し、更に初句の「いざさらば」に反転する。それはその通りだが、こゝは『大系』の注するように、仙洞の「花に睦れし、（その花の）盛り」ではなかるう。仙洞の「花に睦れし、（その我が）盛り」であらう。

そして「程もあらし」は、久保田淳氏の言われた通り「盛り思ふも程もあらし」なのであって、「盛り」そのものが「程もあらし」ではない。「この歌は鳥羽院の栄華の、程もなき移ろいを予見したように受け取られかねない不吉な歌で、宮廷や仙洞の周辺では公開の憚られるような歌だった」のではないのだろう。「花に睦れし我が盛り」を謳歌する時間にははやない、とそれは、院の「北面」としてある自分の、今の境涯の儂さを見極め、それへの訣別を歌ったものではないか（1）。

鳥羽法皇の崩御は、保元元年<sup>(1156)</sup>七月二日、西行出離の16年後の事であった。それは先にみた通りであるが、法皇崩御のその日から九日後の、七月十一日未明から辰の刻までの僅か四時間の攻防で決着のついたといったのが「保元の乱」であった。

この時、敗者となられた崇徳上皇の、今は亡き鳥羽院に対する、更には異母弟の後白河天皇に対する不満を謀反にまで駆り立て、行った

のは、他ならぬ『台記』の筆者の藤原頼長であった。頼長は、これより先、仁平元年(1151)に左衛門督藤原家成邸追捕事件なる事件を起している。それは、その年の七月、頼長の雑色が家成の下部に凌辱された。それへの報復で頼長は腹臣の隨身秦公春に、その下部の追捕を命じた。公春は家成邸に乱入して狼藉を働いたというものである。

この事件によって、既に鳥羽院政初期から「天下事一向帰家成」といわれる程に家成を寵愛していた鳥羽院の怒りをかい、頼長は摂関家の中に在って、父の忠実や兄の忠通とも離れて、孤立するようになった。

その失意の中で、やはり鳥羽院や後白河天皇に疎外されて不遇をかこっていた崇徳上皇と結びついたのであった。がその結果は、鳥羽院は頼長を「ウトミ思召」すようになり、ついに頼長は保元の乱によって「身ヲウシナウ」こととなったと『愚管抄』の述べる通りである。

事件の発端となった、家成の下部に凌辱を蒙った雑色は、頼長が寵愛していたという可能性がある(『台記』久安四年(1148)八月十七日の条)。

また、家成邸に乱入した隨身の秦公春も頼長が「無ニアイシシ籠シケル隨身公春」であった(『愚管抄』)。頼長は、寵愛の相手に対する仕打ちに怒って、同じ寵愛の相手を使って報復したのであった。

かくの如くにも、家成邸追捕事件には、当時の社会に広がる男色関係が大きな影を落していた。しかもその事件が「保元の乱」につながっている、もはやそうした男色の関係の把握なしには、当該期の政治

史は語れない、と五味文彦氏が慨嘆される通りである(2)。

男色という、そういう陰微な病根によって、その内部を蝕まれていた鳥羽院の栄華の、程もない移ろいの予見は、或は西行にもあったかも知れない。がそうした予見よりも遥かに大きく西行をとらえていたものは、「花に睦るゝ」如き、まさに陰微に爛れた<sup>ただ</sup>としか言いようのない、「北面」の侍として院の栄華に寄生する、その無惨とも言える己れの立場に対する屈辱の思いであったのではないか。

「保元の乱」に向っての、暗く傾斜してゆく時間の中で、その庇護者であった白河法皇の亡きあと、鳥羽院の愛をも失ってゆくこととなる崇徳上皇の母后待賢門院璋子がみまかったのは、久安元年(1145)十二月のことであった。それは、西行の出離より僅かに五年、彼はその時28歳、璋子は45歳であった。

待賢門院かくれさせ給ひたりける御跡に、人人又の年の御はてまで候ひけるに、しりたりける人のもとへ、春花のさかりにつかはしける、  
たづぬとも風のつてにもきかじかし花とちりにし君が行へは  
返し、

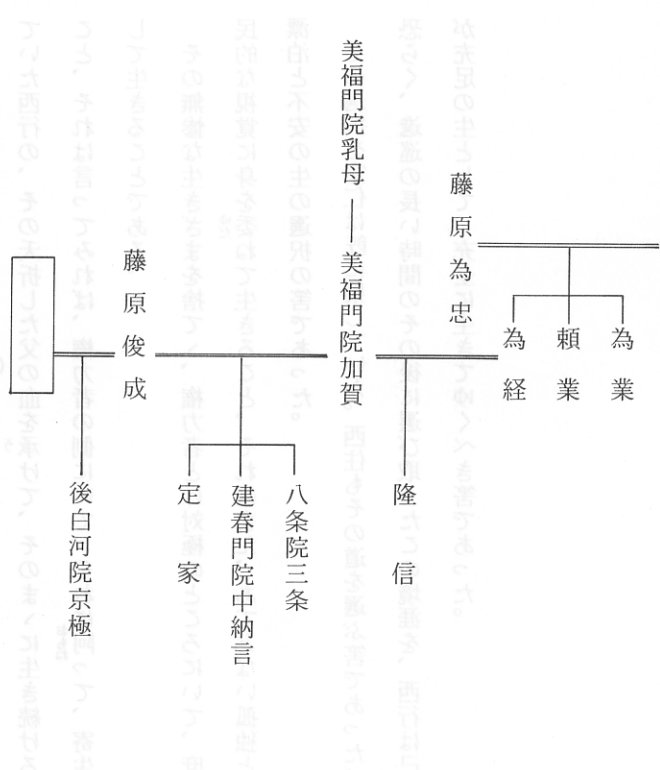
ふく風の行くへしらするものならば花とちるともおくれざらまし

待賢門院安芸

『西行上人集』がおさめるこの一段の詞書の「しりたりける人のもとへ、春花のさかりにつかはしける」のところは一本に「南面の花散りけるころ、堀川の局のもとへ申しおくりける」とある。「堀川の局」は、康治元年(1142)二月の、璋子の落飾の際にも璋子につき従った女房である。西行の「たづぬとも」の歌には、璋子や、その所生の上西門院統子(大治元年(1126)生れ。義清出家の保延六年(1140)の年は15歳)や、女房堀河らと、恐らく共有していたと思われる昔日の日の花月の宴に寄せ、もはや取り返すべくもない愛惜の情が溢れている。

或は、そういう花月の宴を、夢寐にでもいい胸裡に思い描いてみる、そのことが、「花に睡るゝ」無惨とも言える屈辱の思いから、西行を救っていたのではないか。

「女院の占める歴史的位置は、政治的、社会的な面ばかりでなく、さらに文化的面においても重要である。和歌の世界では女房歌人の存在とともに、次の系図に明らかなように、為業、頼業、為経の所謂常盤の三叔や、俊成、定家の御子左家の歌人が女院、女房との交流のなかから育っていった。なかでも俊成、定家の周辺はすべて女院女房であり、官位の昇進も女院の後押しでなされている。彼らの歌人としての成長は、女院、女房の世界と切り離しては考えられない。



また、俊成や定家などとは対照的な存在とみられがちな西行についても、待賢門院、上西門院の両女院、女房との交流がきわめて大きな意味を持っていたことは、『出家集』にのる和歌の詞書からも知られる。

早くから「花の下にて春死なん」という辞世をよんだ西行が、上西門院の死(文治五年(1189)七月、64歳)の翌年「そのきさらぎの望月のころ」に死んだのも偶然とは言えない。果して西行は謎の出家をしてい

るのであり、そこには上西門院への追慕が認められよう。

そうでなくとも、西行は女院、女房の世界の縁辺を漂泊していたことは間違いないのである。

総じてこの時代の文化について考える時、女院、女房の世界を無視しては論じられない。女院文化圏ということばを使って表現することも可能であろう。「平家文化圏」という表現がときに使われるが、それは女院文化圏に含まれるものにすぎないのである」(3)。

長い引用になったが、これは五味文彦氏の断案である。

西行の死には、上西門院への追慕がこめられてあったというのはともかくとして、西行の「謎の出家」は、閉ざされた北面の世界からの、「女院文化圏」とも言うべき、広く解放された世界への転身であったのではないか。

その意味では、西行は母の血を選んだことになる。西行の母は、『尊卑分脈』に「監物源清経の女」とある。清経は、その技艺に於いて今様の奥儀を極め、また蹴鞠に長じ、また遊里に精通する、当時の言葉でいう「数奇者」「数奇人」の代表選手であった(4)。そして清経の養女、つまり西行の母乙前は、後白河院の今様の師匠である。

後白河が院政をはじめる年の前年の保元二年(1157)に乙前は既に古稀に達していた。この法皇と乙前との出会いが、『梁塵秘抄』の成立を決定的なものとした。法皇は、後に清経と同棲することになる美濃国青墓

にいた今様の名手目井の養女となってその伝系を継承した五条の乙前を正しい今様のふりを伝える者として、その伝授を受けられたのである。今様は、「当時の貴族的な短歌には全く望み得なかったような生活詩的な歌謡の珠玉であり、そこには、何よりもその風俗詩としての庶民的視覚のあざやかさがある」(5)と志田延義氏は言われる。

「抑西行者、本兵衛尉義清也、左衛門大夫康清子、以重代勇士仕法皇」(『台記』康治元年(1142)三月十五日の条)と頼長の目に見えていた西行の、その夭折した父の血を承けて、そのまゝに生き続けること、それは言ってみれば、権力者の側にいて、それに阿おまねって、寄生して生きることである。

その無惨な生きざまを捨て、権力者とは対極のところにおいて、庶民的な視覚に身を委ゆたねて生きること、それはまた、あてどない孤独と漂泊と不安の生の選択の筈であった。

その選択を空仁は既に果していた。西住もその道を選ぶ筈であった。恐らく、逡巡の長い時間のその後を選び取ったこの境涯を、西行は己が充足の生として、完全に生きてゆくべき筈であった。



七

あづまのかたにまかりけるに、よみ侍りける

西行法師

年たけて又こゆべしと思ひきやいのちなりけりさ夜の中山

(定・隆)

あづまのかたへ修行し侍りけるに、ふじの山をよめる

西行法師

風に靡くふじの煙の空に消えて行方もしらぬわが思ひ哉

(定・雅)

共に『新古今和歌集』に載る西行の絶唱である。先の歌は、巻第十の巻末近く羈旅歌94首中の第92首目に定家と家隆の撰で入っている。後の歌は、定家、雅経の撰で巻第十七雑歌中の部の、これは巻頭近くに入っている。

共に定家の撰ぶところとなったこの二首は、その歌柄とそれに付けた詞書からみて、文治二年(1186)西行69歳の時の陸奥国行の際のものと思われる。

『西行上人集』も、この両歌を共におさめているが、先の歌につけた詞書に「あづまのかたへ、あひしりたりける人のもとへまかりけるに、さやの中山見しことの昔に成りたりける、思出でられて」とある。

「あひしりたりける人」は、奥州の同族藤原秀衡のことであろう。

先に触れた通り、文治二年のこの年、西行は俊乗坊重源との約を果すべく、東大寺大仏の塗金の料を勧進するために秀衡の許に旅立ったのである。「さやの中山見しことの昔になりたりける」とある、そして、「年たけて又こゆ」と詠う、それは、康治二年(1143)126歳の頃に重なる、40余年を経ての「みちのく」再訪の旅であった。

それは、今昔の感もひとしおの「みちのく」行であったと思われるが、この歌の勅撰集に載るのは、『新古今和歌集』に定家によって撰ばれたものだけであり、又、『西行上人集』はこれをおさめているが、西行の自撰と思われる『山家集』にはこれを載せていない。

後の歌について、西行の歌友である40年近い後輩の若き俊秀慈円は、老友西行の死を悼んで、寂蓮の許に贈った自作三首に自注して、「又、風になびくふじのけぶりの空にきえて行へもしらぬわが思ひかな、もこの二三年の程によみたり、これぞわが第一の自嘆歌と申しし事を思ふなるべし」(『拾玉集』5158-5160番歌の左注)と言っている。

この慈円の言葉からみても、前の歌も含めて、これらの歌は文治二年の「みちのく」行の詠に違いない。もし『山家集』が文治二年以前

の自撰だとすれば、これらの歌の『山家集』に載っていないことの説明はつくが、奥州から帰って、洛西嵯峨に止宿した頃に編んだと思われる自歌合、それは後に俊成、定家父子に加判を依頼することになる、恐らく生涯の自作の粹を撰んだと思われる『御裳濯川歌合』にも『宮河歌合』にも、この両歌合は入っていない。特に、この後の「風に靡く」の歌は「わが第一の自嘆歌」と自身で言っておきながらも、両歌合に入れておらないのである。

それゆえ、この両歌合の成立は、「旅行前で、生涯の歌の整理をして、神宮に旅の無事でも祈願したもの」(6)ではないかと石田氏は推定された。

しかし、この二つの自歌合を編んだのは、後に詳しく述べる通り、やはり旅の後であり、その自歌合にこれを採らなかつたのは、前の歌はともかくとして、「風に靡く」の後の歌は、己が出離50年の境涯を詠出し得たと自らに許し得る作品群の中におさめるには、西行に於いて、躊躇する一つの拘わりがあつたのではないか。

『新古今集』は、「風に靡く」の歌の前に一首おいて、「風に靡く」の歌と同じく「西行法師」の記名のもとに、

伊勢にまかりける時よめる

すゞか山浮世をよそにふりすてていかになり行く我が身なるらん

の歌をおさめている。これと「風に靡く」の歌との間の一首は、

題不知 前大僧正慈円

よの中を心たかくもいとふかなふじの煙を身のおもひにて

西という慈円の詠である。

「心を高く持してこの浮世を厭い早く世をのがれたいと思う、富士山から高く立ち上る煙を我が理想として」と『大系』は頭注する。慈円の歌が、出離への願いを詠んで「心高く」持する矜持きよとに満ちているのに比べて、西行のそれは、同じ「富士の煙」を、その詠の発想に持ちながらも、出離50年にしてなお定まらぬ「わが心」——『大系』が定本にしている小宮堅次郎氏蔵本の第五句は「わが思ひ哉」とあるが、『大観』が定本に選んだ谷山茂氏蔵本は「我が心かな」としている——を思いあぐねている。

そして、その見あぐねる「わが思ひ」に「行方もしらぬ」前途への不安を表出する下の句は、その出離50年の時間を隔て、「鈴鹿山」の歌の、やはりその下の句が詠出する、未来へのあてどなき不安に照応しているのである。

『新古今集』が撰んだ歌人の中で、西行が94首の最多を撰ばれていることは周知の通りであるが、その中、定家が撰歌したものは61首である。61首中、定家の単独撰は7首であり、多くは家隆や雅経との共撰になっている。

更に、撰をうけた歌の中で、西行が、その出離のことと係わって詠んだと推定されるものは38首で、その中の31首に定家が係わっている。今、その38首を撰集の所収順に挙げてみると次のようである。

巻第二 春歌下

題不知

126 ながむとて花にもいたくなれぬれば散る別れこそかなしかりけれ。  
(定家・家隆・雅経) 『山家集』

巻第四 秋歌上

だいしらず

299 おしなべて物を思はぬ人にさへ心をつくる秋の初風  
(定家・家隆) 『宮河歌合』

300 あはれいかに草葉の露のこぼるらん秋風たちぬみやぎ野のはら

(有・定・隆・雅) 『御裳灌川歌合』

だいしらず

362 心なき身にもあはれはしられけり鴨立つ澤の秋の夕暮

(定・隆・雅) 『御裳灌川歌合』

巻第六 冬歌

題しらず

625 津の国の難波の春は夢なれやあしの枯葉に風渡るなり

(有・定・隆・雅) 『御裳灌川歌合』

題しらず

627 さびしさにたへたる人の又もあれな庵いほならべん冬の山里

(定家・家隆) 『山家集』

歳暮、人につかはしける

691 おのづからいはぬを慕ふ人やあるとやすらふ程に年の暮れぬる

(定家・家隆) 『山家集』

だいしらず

697 むかし思ふ庭にうき木をつみ置きてみしよにもにぬ年の暮かな

(有・定・隆・雅) 『宮河歌合』

巻第十 羈旅歌

題不知

937 都にて月をあはれと思ひしは数にもあらぬすさびなりけり

(雅経) 『山家集』

938 月みばと契りおきてし古郷の人もよこよひ袖ぬらすらん

(定家・家隆) 『御裳濯川歌合』

あづまのかたにまかりけるに、よみ侍りける

987 年たけて又こゆべしと思ひきやいのちなりけりさ夜の中山

(定家・家隆)

旅のうたとて

988 思ひおく人のころにしたはれて露分くる袖のかへりぬる哉

(定家)

卷第十四 恋歌四

題不知

1297 うとくなる人をなにとて恨むらんしられずしらぬをりもありし

(定家・家隆) 『異本山家集』

1298 いまぞる思ひいでよと契りしは忘れんとてのなさけなりけり

(後鳥羽院親撰) 『山家集』

1307 あはれとてとふ人のなどなかるらん物思ふ宿のをぎのうはかせ

(有・定・隆・雅) 『宮河歌合』

卷第十六 雑歌上

題不知

1470 よの中をおもへばなべてちる花の我が身をさてもいづちかもせ

(定・隆・雅) 『宮河歌合』

ん

題不知

1530 月をみて心うかれし古の秋にもさらにめぐりあひぬる

(定・隆・雅) 『山家集』

1531 よもすがら月こそ袖にやどりけれ昔の秋を思ひいづれば

(定家・家隆) 『山家集』

1532 月の色に心をきよくそめましや都を出でぬ我が身なりせば

(家隆) 『宮河歌合』

1533 すつとならば浮世を厭ふしるしあらんわれ見ばくもれ秋の夜の

(有家・雅経) 『宮河歌合』

月

1534 ふけにけるわがみの影を思ふまにはるかに月のかたぶきにける

(定家・雅経) 『御裳濯川歌合』

卷第十七 雑歌中

伊勢にまかりける時よめる

1611 すぐか山浮世をよそにふりすていかになり行く我が身なるらん  
（有家・家隆）『山家集』

あづまのかたへ修行し侍りけるに、ふじの山をよめる

1613 風に靡くふじの煙の空に消えて行方も知らぬわが思ひ哉  
（定家・雅経）『異本山家集』

（定家・雅経）『異本山家集』

題不知

1617 よしの山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人やまつらむ

（有・定・隆・雅）『山家集』

題不知

1640 たれすみてあはれしるらん山里の雨ふりすさむ夕暮の空

（定・隆・雅）『宮河歌合』

題不知

1657 山里に浮世いとはん友もがなくやしく過ぎし昔かたらん

（定・隆・雅）『異本山家集』

1658 山里は人こさせじと思はねどとはるゝ事ぞうとくなりゆく

（定家）『異本山家集』

卷第十八 雑歌下

題不知

1746 数ならぬ身をも心のもち顔にうかれては又かへりきにけり

（定家・雅経）『異本山家集』

1747 おろかなる心のひくにまかせてもさてさはいかにつひの思ひは

（定・隆・雅）『異本山家集』

1748 年月をいかでわが身に送りけん昨日の人もけふはなきよに

（定家・家隆）『宮河歌合』

題不知

1778 何処にもすまれずばたゞすまであらん柴の庵のしばしあるよに

（雅経）『異本山家集』

題不知

1808 またれつる入相の鐘の音すなりあすもやあらばきかんとすらん

（定・隆・雅）『宮河歌合』

題しらす

1828 よを厭ふなをだにもさは留めおきて数ならぬ身の思ひいでにせ

（定・隆・雅）『山家集』

1829 身のうさを思ひしらでややみなましそむく習ひのなきよなりせ

（定家・家隆）『山家集』

ば

1830 如何すべきよにあらばやはよをもすててあなうのよと更に思

（定家・家隆）『山家集』

はん 八 (定家・家隆) 『異本山家集』

1831 何事にとまる心のありければ更にしも又世のいとほしき

(定・隆・雅) 『山家集』

題不知

1842 なさけありし昔のみ猶忍ばれてながらへまうきよにもふるかな

(定家・家隆) 『山家集』

卷第廿 釋教歌

観心くわんしんをよみ侍りける

1979 やみはれてこゝろの空にすむ月はにしの山べやちかくなるらん

(後鳥羽院親撰) 『山家集』

秋歌上、300番歌については、これを宮城野での作とする解もあるが、これはやはり、都にいて、立ち初めた秋風の中で、曾遊の宮城野の秋を思いやつの詠(7)とよむ方が自然であろう。

その「秋風たちぬ」という発想の中に西行は、大きな秋を感じているのだ。「秋風」に感じられる秋は、単なる季節の秋であるが、「秋風たちぬ」に感じられる秋は、生命としての秋で、その生命としての

秋が、希望と、新鮮さと、復活のよろこびとをもって、さやかなそよぎをともないつつ、万象的に、動き、よみがえって来る、それを「秋風たちぬ」という発想によって、大きくとらえたのである、(8)と石田氏は言われる。

そして、西行の出離にも、漂泊の生涯にも、すぐれてその詩人性をみる氏は、西行の歌には、歌の内部に、さわやかな野の風のような、詩人の詩の清涼な音がある(9)と言われる。

氏のそういう読みを否定する程の確かな定見が、私にある訳ではない。が、229番歌で「秋の初風」は、「物を思はぬ人」にまでも、一樣に物思いの心をつける、と西行が言う。その秋の風の中に、漂泊者としての自分を立たせる彼に、秋風は希望や、復活のよろこびを伴った清涼な音としてばかりあるのであろうか。「こぼれ」落ちるものは「草葉の露」ばかりと言えるであろうか。

こゝにあるのは、*Le vent se lève, il faut tenter de vivre.*

「風立ちぬ、いざ生きめやも」と歌ったヴァレリーや堀辰雄の近代の心ではない。こゝにあるのは、みちのくの秋風の中に立ち極まった、いまだ出離の思いの定まらぬ漂泊者の悲しい心ではないのか。

362番歌「秋の夕暮」は、『新古今』に寂蓮の、また定家の、それと並んで編集されて、あまりにも著名になり過ぎた。それはあまりに、



過大に評価され過ぎていると思う。

西行の歌に、

訪ふ人も思ひ絶えたる山里の寂しさなくば住み憂からまし

（『山家集』937番）

というのがある。家永三郎氏は、「この玲瓏たる境地は、古代から

中世にかけて中国の隱逸思想や仏教の山林修行方式に媒介されつつ成

熟した、わが国独特の宗教的自然觀の極限をなすもので、限り無く深

く澄み透った世界である」（『日本思想史における宗教的自然觀の展開』

と賞讃されている（10）。

氏のこの言葉は、更に他に受けられて、「この歌では、さびしさは

すでに苦痛の要素を減少して、さびしきがゆえに美しい、一種の美と

なっているのであるが、ここに至ると、草も木も月も花も、さびしき

がゆえにその美を深くするのであって、この境地がすすむと、

心なき身にもあはれは知られけり鳴たつ澤の秋の夕暮

という歌によって、万象の眞実をさびしさの美を通して感じ得る、

さび系の美の把握に達することが考えられる。

このように、さびしさがあらゆる対象を深い美とし、時にはそのな

かに存在のすがたまでも感じ得るようになる、眼にふれ耳にふれる

ものはすべて深い美となり、芭蕉が「見るところ花にあらざといふこ

となし」といった境地が、ひらけるのではないかと思う」（11）といっ

た理解が出て来る。

だが、この歌をどのように理解するためには、家永氏も言われてい

る「古代から中世にかけて」という、その西行の終焉の後に来た中世

の長い動乱の、その哀しみの時間を越えることを必要としたのではな

いか。

「心なき身にも」と西行は言う。「世を逃れて、愛憎悲喜の心を捨

てたはずの我が身」、その「心なき身にも」おのずから秋の哀れは思

い知られた（12）、という。それは、「さび」「わび」といった理念

に觀念化されてゆく思念の次元にはまだ遠く、こゝにあるのは、いま

だ出離の心定まらぬ西行の、われとわが身をいとおしむ漂泊者の素直

な感懐である。

625 番歌の冬の歌に、大系は先行歌として、『後拾遺集』の

心あらむ人に見せばや津の国の難波あたりの春のけしきを

の一首を挙げている。或は西行に、

心あらむ人に見せばや津の国の難波あたりの春のけしきを

の一首を挙げている。或は西行に、

心あらむ人に見せばや津の国の難波あたりの春のけしきを

の一首を挙げている。或は西行に、

難波瀉みちかきあしのふしのまもあはでこのよを過してよとや

の伊勢の、愛憐の一首が見えていたかどうか。

難波は、西行に先行した平安の貴族にとつてばかりでなく、現代に至るまで、その長い時間を回想の叙情を誘う風土であり続けて来た。

### 故郷の街

あまた 鉄橋を渡る貨物列車 堤の草に山羊が二匹

川蝦を釣る子供らは 渚に竿をならべてゐる

その森々たる水の彼方 煤煙深い街の上に いま三日月は落ちか  
かり

ランプをともし外輪船……

(三好達治『閒花集』)

『閒花集』は、交遊僅かに数載を越えなかつた梶井基次郎の墓前に

「野草閒花、摘んで以て」供えることとなつたが、その後記の中で三好は書いている。

「私はただ私の眼前の自然の中から、それだけが何かの表徴である一つの閃光をうけとつた。私はそれを、最も短いことばで書きとめた

のである。最も短いことば、それは最も単純な、最も明瞭なことばであった。由来詩歌は、私にとつては、最も明瞭な何ものかであった。

最も単純な、たとえば体温計の目盛のような。そういうえばその時分、私自身が自然の腋の下に挟まれた体温計でもあるような気持さえした(『ある魂の径路』)と。

「あまた」と歌い起す四音の、「最も短い、最も単純な、最も明瞭な、たとえば体温計の目盛りのような言葉」で切り詰め書きとめられた昔と変らない回想の風物。

それは、「一つの閃光」となつて、懐かしい幼年の日の生活感情をまざまざと呼び戻して来る。その回想の風物は、「森々たる」時間の彼方に詩人を誘つて、今の老残の憂愁にひそやかな慰撫の目盛りを刻んでくれるのだ。

西行が、「あしの枯葉に風渡るなり」と最も短い言葉を書きとめた時、眼前の自然の中から、それだけが「何かの表徴である一つの閃光」となつて、人の世の寂寥が、漂泊者として存在することの悲しみが、油然とわき上つて来る。その時、短かい節を連ねて微風にそよぎ渡る回想の春景色は瞬時に遠のき、回想の風景が本来的に持つ慰撫の情緒は消えて、ただ寂寥ばかりが立ち現われて来るのである。

その、季節に触発される寂寥を歌つた歌は、西行に多い。625番歌に

一首隔てて同じ西行の627番歌がある。この二首を中にして、624番歌より628番歌までの五首を定家は、「冬枯の歌」として並べ採っている。

西行の二首の歌は家隆らとの共撰であるが、残りの三首はすべて定家の単独撰である。こゝに同趣の歌を採歌しようとした定家の考えははっきりしているが、並べられた和泉式部、大納言成通、康資王母らの歌三首に比して、西行の歌う「さびしさ」は位相を異にして深い。

この深い寂寥は、西行歌の最も大きい特質である。と言うより、この寂寥は西行の歌のすべてを覆っていると言ってもいい。今、その歌の言葉に頭に「さびし」とあるものを能う限り挙げてみる。先ず『山家集』から、

やまごとに(板本「やどごとに」)淋しからじとはげむべし煙けぶり

こめたり小野の山里

雲取くもりや志古しこの山路はさておきて小口おぐちが原の淋しからぬか

水しく沼のあしはら風さえて月も光ぞさびしかりける

水の音は淋しき庵いはの友なれや峯のあらしの絶え間絶え間に

霜かづく枯野の草の淋しきにいづくは人の心とむらん

霜にあひて色あらたむる葦あしの穂ほの淋しく見ゆる難波江なにはえの浦

玉巻きし垣根のまぐず霜がれて淋しく見ゆる冬の山里

庵いはにもる月の影こそ淋しけれ山田ひたは引板ひたの音ばかりして

木の間洩る有明の月をながむれば淋しき添ふる嶺ねの松風

松風の音あはれなる山里に淋しき添ふるひぐらしの聲こゑ

とふ人もおもひ絶えたる山里の淋しきなくば住み憂うれからまし

山里はしぐれしころの淋しきに(板本「さびしきに」)嵐の音

は(板本「あられの音は」)やゝまさりけり

さびしさにたへたる人のまたもあれな庵いはならべん冬の山里

「閑居友なき心なるべし。閑居に能く堪へて富貴栄花に心動

かさぬ友あれかし、人目も草もかれたり。山里世外の味語

らはむ友とせむ心なるべし」(『八代集抄』北村季吟)

荒れたる草のいほりの寂しさは風よりほかに訪ふ人ぞなき

津の国の葦あしの丸屋まやの淋しきは冬こそわけて訪ふべかりけれ

かきこめし裾野の薄霜枯れて淋しきさまさる柴いばの庵いはかな

花も枯れ紅葉も散らぬ(西行上人集「紅葉も散りぬ」)山里は

淋しさをまた訪ふ人もがな

また『西行上人集』から

さびしさは秋見し空にかはりけりかれ野をてらす有明の月

家毎に夕の炊煙をたてている小野の山里、独り庵に聞いている水の

音、風の音、また引板ひたの音、じっとそれに耐えている西行を思う時、

隠遁というものの悲しさがよく分かるように思われる(13)、と石田氏は言われた。

その悲しさ、寂しさは「冬の山里」の後の歌に注して季吟の言う、「閑居友なき心なるべし」の孤独の悲しさ、寂しさである。だが、その「さびしさにたへたる人」というのは、これも同じ季吟の言う、「閑居に能く堪へて富貴栄花に心動かさぬ友」と言い、「山里世外の味語らはむ友」と言う、そういう閑居の寂寥を乗り越え得た人と言うのではない。

それは、山里の寂しさに涙してじっと耐えている人である。そこにあるのは、肩肘張った出家人の虚勢ではない。自ら選択した出離の生の、その心のいまだ定まらない、その口惜しさの中であって、しかし、その寂しさを自ら誥うべない、真実にその悲しみをみつめて思い耐えている漂泊者の心が、そこにはある。

その漂泊者の孤愁を自らに肯うべなう西行は、またその孤愁を癒いすべき故郷人を思い、その人の訪れを待ち焦れる、自らの心弱さを歌うことに、何の銜てがいも示さなかった。前掲の『新古今集歌』627番歌に続く、691・938・988・1617・1657・1658番歌で、人の恋しさを歌う西行は、1808番歌では、

待たれつる入相の鐘の音すなりあすもやあらばきかんとすらん

と歌う。終日を独り居の寂しさにいて、今聞く夕の鐘の音に西行は、自分と遠くはない人の生活を思っているのだ。上の句を、「今は静かに死期を待つ身であるが、心待ちにせられた入相の鐘の音が聞えることよ」と説く『大系』の解はあたらしない。今の西行に、そういう煩惱を越えた境地はない。「あすもやあらば」という、それは「明日までもひよっと我が命があるならば」(14)と危ぶむ心ではない。終日を「待たれ」た人の打つ鐘の音は、寂しい夕暮れの、その明日に続く西行の長い独り居のあけくれに、紛まうことなく響き続いて来る筈のものなのである。

そういう西行に、出離の心の定まる時は容易には来ない。1530番歌から1534番歌の五首、また1746番歌から1748番歌の三首、そしてまた、1828番歌から1831番歌の四首の、共に「題不知」としてある、連作かと思紛うそれらの歌どもには、出離の身を省みて安堵あんどと不安に揺れ動く西行の心が交々に歌われている。

前掲の通り、選者名の略記を持たぬ、その故に恐らくは後鳥羽院の御選歌かと思われる、撰集中最後の一首1979番歌は、その意味で、出典を明らかにし得ないことも相俟あいまって、西行の作と急には断じかねる歌のふりである。釋教歌を独立した部立とするようになった『千載集』以下の勅撰集にあって、「勸進僧西行」の歌は或は、釋教の巻尾を飾るに相応あわしい一首として、構えて撰者に迎えられたものであったかも

知れない。

西行の心に「闇はれて澄む月」の宿ることは遂になかったのである。

雑歌上1470番歌は、後に西行自身によって、彼の自歌合『宮河歌合』の中に採られて、定家の判詞に「山水の花」とある「花さへに」の歌と番えられることとなる、彼にとっては会心の作と言えるものであった。

九番 左

17世の中をおもへばなべて散る花のわが身をさてもいづちかもせ

む

右

18花さへに世をうき草になりにけり散るを惜しめば誘ふ山水やまづ

両歌はともに『山家集』には見えず、『西行上人集』に105・106番歌として、並んで載っている。『西行上人集』は『宮河歌合』から採歌したものかも知れぬ。『山家集』が、文治二年(1186)西行69歳のみちのく再訪の旅の以前に自撰されたものとすれば、それに見えないと言うことは、これらの歌が、本節のはじめから問題にして来た、「風に靡く」の歌と同じく、みちのく再訪時か、或はその後の時期の詠作ということになる。

これに判を依頼された定家は、文治五年(1189)定家28歳の十月に、次のような判詞を書いて西行に贈っている。

右歌、心詞こころばにあらはれて、姿もいとをかしう見え侍れば、山水の花のいろ、心も誘はれ侍れど、左歌、「世の中を思へばなべて」といへるより、終りの句の末まで、句毎ごとに思ひ入れて、作者の心深く悩なやませるところ侍れば、いかにも勝ち侍らむ

と。西行は、定家のこの判詞をわが意に適ったものとして読んだ。彼は、『贈定家卿文』の中で、定家への褒詞ほうしを書き連ね、これは今までの歌合の判詞にはなかった「あたらしく出でき候ぬる判の御詞にてこそ候らめ」とまで褒めた。西行が、その秀れた創案と褒めた定家の判詞というのは、「作者の心深く悩ませるところ侍れば」というところで、「なやませると申す御詞によりづ皆こもりてめでたくおぼえ候」という。

この、作歌の苦悶をいう言葉にすべてがこもっているという。それは、「心」の、歌の「詞」や「姿」に容易には表出し得ぬ作歌の苦悶に歌人として生きる命の燃焼をみたと言うのか。或は、歌の「詞」や「姿」には容易には捉え難い、或は容易には納まり切らない無限の、あてどない己が思いに呻吟する心をみたと言うのか。

それはいずれとも言えようが、西行にあってこの苦悶は、恐らく己が思いながらも、容易には定め難くも捕捉し難い出離の心の、己が身内に動揺して止まぬことの口惜しき悶えであつたらう。



「世の中をおもへばなべて散る花の」という。世事万端、無常の風に舞う落花の如し。石田氏は、「飛花落葉ということばが当時愛用されたのは、無常のかなしみと美しさとが融合しているからであるが、西行のこの上の句は、それ以上に官能的で、それ以上に美しい。ちょうど春の夕暮に、満山の落花、満都の落花を浴びているような、幻想をさえ誘う美しさをもっている」(15)と言われた。

その美しい落花を浴びながら然し、西行は、声を落して、「わが身をさてもいづちかもせむ」と歌う。その時、落花繽紛たる美しき幻想は消えて、残るのはただ、出離の身には口惜しき行方定めぬ放心とあてどなき不安ばかりである。

「風に靡く」の歌に西行は、虚空に消えてむなしい噴煙に託して、行く方も分かぬ己が出離の思いのあてどなき不安を詠んだ。その定まらぬ思いは、出離五十年の時間を隔て、「鈴鹿山」の歌の、やはりその下の句が詠出する未来へのあてどなき不安に照応しているのだ、と私は言った。その不安に、或はそのあてどなき漂泊の思いに、この「世の中をおもへば」の歌もまた、「風に靡く」の歌と重層して、同じ五十年の時間を越えて「鈴鹿山」の歌に照応しているのである。

西行にあって、「花に睡れし我が盛り」への訣別は、夭折した父の血を承けてそのままに生き続けること、言ってみれば権力者の側にい

て、それにおもねり寄生して生きること、その無慚な生きざまへの訣別であったが、それは同時に、あてどのない孤独と漂泊と不安の生の選択の筈であった、と私は前節の終わりに書いた。

その選択を空仁は既に果していた。西住もその道を選ぶ筈であった。恐らく逡巡の長い時間のその後を選び取ったこの境涯を、西行は己が充足の生として、完全に生きてゆくべき筈であった、それも私は書いた。

だが西行に、出離の思い定まる充足の生は容易には訪れなかったのである。

最近、大野順一氏が、「風になびく」の歌に触れて書かれている。

ここにはかつての、たとえば「ゆくへなく月に心の澄みすみてはてはいかにかならむとすらむ」といった雑念は、もはやない。西行は、風になびいて空に消えてゆく、行方も知らぬけぶりにわが思ひを重ねて、そこに游々優々とした安らぎを覚えて、楽しんでゐるやうである。わが思ひをして消えゆくままに消えしめよ、と行方も知らずに消えてゆくわが思ひを見つめるとき、「われ」もまた行方も知らずに消えてゆく。それをゆったりとした心で見えてゐる西行である。これこそ西行の求め求めえた到達点、心のつひのすみかであつたらう。

慈円の伝へるところによれば、西行は「これぞわが第一の自嘆歌」といつてゐたといふ(拾玉集、第五冊)が、その真意はまことによく



理解されよう。西行は「わが第一の自嘆歌」と誰に言ったのでもない。やうやうに辿りつきえた安らぎのなかで、自分自身にむかって言ったのである。過言をあへてすれば、西行はここにおいて時間のなかに還元したのである。身も心もまさしく風の自在性を得たのである(16)。

長く引用しつゝ、氏の言葉に惹かれながらも、やはり違ふと、私は思う。

この時の西行にあったのは、「やうやうに辿りつきえた、游々優々とした安らぎ」ではなかった。それは出離五十年、依然として内にあって、消えることのない未来への不安と、あてどなき漂泊の思いであった。「ゆくへも知らぬわが思ひかな」とは、はてしないわが思ひという意味であろう。人生、宇宙、存在、生死、無常、遠く去った青春、初恋の思い、妻、子、過去はすべて美しく、ゆけるものはすべてなつかしく、しかし、われは古い、笠は黄塵をあげ、つい日は落日のごとく眼の前にある。思ひはてなし。人間の思い、隠者の思い、老愁の思い、旅人の思い、それらが一つとなって、まことに限りなきものがあつたであらう(17)、と石田氏は言われた。「身も心もまさしく風の自在性を得」るには、西行の生身<sup>なまみ</sup>はあまりに熱かつたのである。

## 八

西行がみちのく再訪の旅の途次に、鎌倉の八幡宮の社頭に立つのは文治二年、西行69歳の八月十五日のことである。それは、ユリウス暦で一八六六年九月二十九日のことになる。

これより一世紀後の弘安二年<sup>(1279)</sup>、播磨国細川荘相統の訴訟のために、阿仏尼が京を出たのは、同年の10月16日、鎌倉着は同29日、東海道14日の行程であった。

西行の旅は、俊乗坊重源との約を果すべく、東大寺大仏の塗金の料を平泉の秀衡に仰ぐための勧進の旅であつたが、途次なお勧進のことに泊りを重ねたとすれば、伊勢を発つたのは今の暦日で九月十日頃とならうか。とすれば、西行が富士を見るのは行程の半ば、九月二十日頃のことである。日中の暑熱はなお残るものの、朝夕に立ち初めた清涼の秋気は「ゆくへも知らぬ」、終わることのない漂泊の「わが思ひ」に彼を誘って止まなかつたであらう。

その文治二年の八月十五日の条を『吾妻鑑』は次のように記している。

十五日 己丑 二品鶴岡宮に御参詣。しかるに老僧一人鳥居

の邊に徘徊す。これを怪しみ、景季をもって名字を問はしめたまふのところ、佐藤兵衛尉憲清法師なり。今は西行と號すと云々。よつて奉幣以後、心静かに謁見を遂げ、和歌の事を談ずべきの由、仰せ遣はさる。西行承るの由を申さしめ、宮寺を廻り、

法施を奉る。二品かの人を召さんがために早速に還御す。すなはち宮中に招引し、御芳談に及ぶ。この間、歌道ならびに弓馬の事に就きて、條々尋ね仰せらるる事あり。西行申して言はく、

弓馬の事は、在俗の当初、なまじひに家風を傳ふといへども、

保延三年八月遁世の時、秀郷朝臣より以来九代の嫡家相承の兵法は焼失す。罪業の因たるによつて、その事かつて心底に残し

留めず、皆忘却しをはんぬ。詠歌は、花月に対して動感するの

折節、わづかに卅一字を作るばかりなり。全く奥旨を知らず。

しかればこれかれ報へ申さんと欲するところなしと云々。しかれども恩問等閑ならざるの間、弓馬の事においては具にもつて

これを申す。すなはち俊兼をして、その詞を記し置かしめたまふ。緯終夜を専らにせらると云々。

十六日 庚寅 午の剋、西行上人退出す。しきりに抑留すといへども、敢へてこれに拘はらず。二品、銀作の猫をもって贈

物に充てらる。上人これを拝領しながら、門外において放遊の嬰児に與ふと云々。これ重源上人の約諾を請け、東大寺料に沙

金を勸進せんがために奥州に赴く。この便路をもって鶴岡に巡禮すと云々。陸奥守秀衡入道は上人の一族なり。

『吾妻鑑』は西行の鎌倉訪問をただ、「奥州に赴く便路をもって」の巡礼であつたと言うが、この八月十五・十六の両日の条が語る西行の言動には、ためにするに充分な計算が伺える。

それは目崎氏の言葉を借りれば、西行が陸奥に赴いた当時、砂金の送進は頼朝を経由しなければ不可能となつていた。もともと秀衡は、必要とあらば巨額の金品を惜しみなく都へ送つていたので、隘路はむしろ輸送の点にあつた。西行は頼朝からその保証を得る必要があり、そのため、わざと頼朝や旧知の御家人の眼にとまる辺を立ち廻つたものと、私は考える。しかも西行が鶴岡八幡宮に姿をあらわした八月十五日は、放生会の「流鏝馬」の行われる恒例の日である。頼朝は「流鏝馬」のみならず、あらゆる部門に都の文化を導入しようとしていたから、西行の体得している秀郷流の故実は垂涎的であつた。これを見抜いた西行は、罪業の因だから忘れてしまつたなどと勿体をつけつつ、これを取引の具として活用したのである。西行が頼朝から得たのは、つまらぬ銀作りの猫などではなく、秀衡の貢金を邪魔しないという確約であつた(18)と言ふことになる。

かつての崇徳院の怨霊鎮定に、又この度の東大寺再建のための勸進

に、西行のうちにひそむ熾烈な菩提心をみ、その生き方に経世済民の志を見る(19)という目崎氏の言葉を誦うことに私は吝かではない。が、さまざまにある勸進のかたちの中で、この頼朝との接衝に見せた西行のしたたかな政治的、外交的な手腕の如きは、本来的には、彼が捨てた筈の権勢の世界にあってこそあざとく揮われて来たものではなかったのだろうか。

また、崇徳院の鎮魂役を買って出たのも、院の恨み、怨霊に対する畏怖が、治承、寿永の大乱、平家一門の都落ち、義仲の入洛等のすべてにわたって時代を席捲したものであっただけに、それは一つの時代の取りなし役、今風にこれを言えば黒幕、あるいはフィクサー(fixer)の役を果しているかの観がある(20)。だがしかし、これは、彼が願望した筈の、出離の身の生きざまには余りに遠い姿ではないのか。

彼が選択した、閉ざされた北面の世界からの転身の生は、そういう時代の権勢と係わり、これに棹さして生きることの、その対極にある筈ではなかったのか。

堀田善衛氏が、西行は、徳大寺家の家人であり、平清盛とは同年でともに鳥羽院の北面に仕えていたことがあり、彼の遁世後といえども、権力の中樞に立った人々との交渉は絶えたことがなかった。鳥羽法皇、崇徳上皇、入道信西、平清盛、源頼朝、藤原秀衡等、数えて行けば百

人を越え、出家などというよりも、「政僧」ということばを使いたくなる程の部分の色濃くもっているのである(21)と言われた。だがしかし、それは、西行には最もそぐわない筈の人格認定の言葉ではなかったのか。

九

69歳、古稀を目前にしての、みちのくへの再度の旅は何時果てたのか。旅の後、残り少ない生涯の終わりを西行は何処で過したのか。再び伊勢に帰ったのか、京洛に住んだのか、或は洛西嵯峨に草庵を結んだのか。確実に分かっていることは、河内国の弘川寺が彼の終の栖となったということである。西行はそこで73年の生涯を終えた。文治六年（建久元年）二月十六日未時であった。その終焉を記す俊成の『長秋詠藻』は、既に本稿の冒頭に掲げた。それと並べて、慈円の『拾玉集』また、定家の『拾遺愚草』がこもごもに語る先達への哀惜の言葉を今、こゝに挙げてみる。

長秋詠藻（俊成）

西行 円位ひじりが歌共を伊勢内宮の歌合とて判うけ侍りし後、又西行 同外宮の歌合とて、思ふ心あり、新少将にかならず判してと申しければ、しるしつけて侍りけるほどに、其年去年文治五年河内ひろかはといふ山寺にてわづらふことありと聞きていそぎつかはしたりしかば、かぎりなくよろこび、つかはして後すこし

よろしとて、年のはて比京にのぼりたりと申ししほどに、二月十六日になんかくれ侍りける、彼上人先年にさくらの歌おほくよみける中

ねがはくは花のしたにて春しなん其二月の望月のころ

かくよみたりしををかくしく見給へしほどに、つひにきさらぎの十六日望の日をはりとげけることいとあはれにありがたくおぼえて物にかきつけ侍る

ねがひおきし花のしたにてをはりけりはちすの上もたがはざるらん

拾玉集（慈円）

円位上人宮川歌合、定家侍従判して、おくに歌よみたりけるを、上人和歌起請の後なれど、これは伊勢御かみの御事思ひ企てし事のひとつなごりにあらむを、非可黙止とてかへししたりければ、その文をつたへつかはしたりし返事に定家申したりし八雲たつ神代ひさしくへだたれど猶わが道はたえせざりけりたちかへり返しに申しやる  
しられにきいずがはらに玉しきてたえせぬみちをみがくべしとは  
その判の奥書に、ひさしく拾遺にて年へぬるうらみなどをほの

めかしたりしに、其後三十日にだにもたらずやありけむに程なく少将になりたれば、ひとへに御神のめぐみと思ひけり、上人も判を見て、このめぐみにならずおもふ事かなふべしなどかたりしに、ことばもあらはになりけり、上人願念叶神慮かとおぼゆる事おほかる中に、これもあらたにこそ

拾玉集(慈円)

文治六年二月十六日未時、円位上人入滅臨終などまことにめでたく存生にふるまひおもはれたりしに更にたがはず、世のすゑに有りがたきよしなん申しあひけり、其後よみおきたりし歌どもも思ひつづけて寂蓮入道の許へ申し侍りし

君しるやそのきさらぎといひおきてことばにおへる人の後の世風になびくふじのけぶりにたぐひにし人の行へは空にしられてちはやぶる神にたむくるもしほ草かきあつみつみるぞかなしきこれは、ねがはくは花の下にてわれしなんそのきさらぎのもち月のころ、とよみおきて其にたがはぬ事を世にもあはれがりけり、又、風になびくふじのけぶりの空にきえて行くへもしらぬわが思ひかな、もこの二三年の程によみたり、これぞわが第一の自嘆歌と申しし事を思ふなるべし、又諸社十二巻の歌合太神宮にまゐらせんといとなみしをうけとりてさたし侍りき、外宮

のは一筆にかきてすでに見せ申してき、内宮のは時の手書共にかかせむとて料紙などさたする事をおもひてかく三首はよめるなり

拾遺愚草(定家)

建久元年二月十六日、西行上人身まかりにけるを、をはりみだれざりけるよききて、三位中将のもとへ  
もち月の比はたがはぬ空なれどきえけむ雲の行へかなしな  
上人先年詠云、ねがはくは花のしたにて春しなんそのきさらぎの  
もち月のころ、今年十六日望日也  
返し 三位中将

紫の色ときくにぞなぐさむるきえけん雲はかなしけれども  
俊成の言葉によれば、西行の病臥は薨年の前年の文治五年から薨年の年の六年にかけて前後二年にわたっている。病臥は徐々に来た老衰からのものと覚しく、病勢は文治五年を終わる頃やや劣え、その歳晩に西行は京にのぼったのであるが、文治六年、年明けて間もなくに死は静かに訪れたものようである。  
死の騒擾を語る言葉は、俊成にも、慈円にも、定家にも見えず、それは静かな尋常の死であったものように思われる。と言うよりも、



その「入滅臨終は存生にふるまひおもはれたりしに更にたがはぬ」まことにめでたく「世のすゑに有りがたき」（『拾玉集』往生であったという。西行は、「花の下にて春死なん」という、積年の、美しき死への願いのまゝに逝つたのである。

だが、傍目には「をはりみだれざりける」（『拾遺愚草』）と見えたその死を、西行は真実に、自足の死として迎えたのであろうか。その死を、真実に、美しき恬淡てんたんのそれとして、西行は疑うことなく迎え得たと、自らに許し得たのであろうか。

本稿の冒頭で提出したこの「疑い」を、私はこの稿を終るに当って再び筆をあらためて記さねばならないと思うのである。

というのは、西行が終わりの病を得る文治四・五年の交に、西行自身によって書かれた「円位仮名消息」や「贈定家卿文」の存在をわれわれは知っているからである。

それは、俊成の「円位ひじりが歌共を伊勢内宮の歌合とて判うけ侍りし後云々」とある言葉に係わっているのだが、西行は、みちのく再訪の旅から帰って間もないと思われる時期に、いのちの終わりを予感してか、生涯の歌稿の整理を思い立った。

それらの大部分は、慈円の言葉に見える通り、「太神宮にまゐらせんといとなみし」「諸社十二巻の歌合」となって、これの奉納に当

ては、外宮撰社の分は慈円自身が書写し、内宮撰社の分は当代の能書家が承って書くこととなった。また、これと同時に、『御裳灌川歌合』『宮河歌合』として、特に歌稿の粹を集めた二巻の36番（72首）歌合は、これは、俊成の言葉にあるように、前者は伊勢の内宮に、後者は外宮に夫々奉る歌合として編まれ、その奉納に先立って、西行は夫々に俊成と定家にその判詞を依嘱したのである。

俊成の判は直ぐに成ったが然し、定家の判詞は依嘱されてから、『玉櫛たましげ笥二年あまり』（『宮河歌合跋文』）遅延に遅延を重ねて容易に完成しなかった。この間の事情を知悉していたと思われる慈円の言葉によると、それが完成して西行の許に贈られて「其後三十日にだにもたらず」して定家は念願の「少将」になっている。定家が少将になつたのは、文治五年十一月十三日のことであるから、判詞を書き終えて病臥の西行の許に「いそぎつかはし」たのはそれより約30日以前の文治五年の十月の半ば頃と思われる。とすれば、定家が西行から判詞を依嘱されたのは文治三年の十月頃であらうか。この歌合の編纂が、文治二年の西行のみちのく再訪の旅の後と考えられていることと時間の上では充分に符号する。

この二年間西行は、老衰を意識してか定家の判が遅延することをひどく焦慮した。

「みもすそのうたあはせのこと、じゅうどのによく申しをかれ候べ



し。かくほどへ候ぬ。人々（伊勢の神官ら）まちいりて候。太神宮定てまちおはしますらむ」と言う父俊成宛のこの文面から推して、現存する『仮名消息』のこの一通にとゞまらず、また父の俊成だけにとゞまらず、西行の定家への判詞の督促は一再ではなかったように思われる。そのことは、「御裳濯宮河に急ぎ披露し候べしと、人（伊勢の神官）も待ちいりて候よし、度々申し遣し候」とある『贈定家卿文』を見ても明らかである。

定家の筆を洩らせたのは何であったのか。それは、「かくれては宮（「道」異本）を護る神の深く見そなはさむことを懼れ、あらはれては家に伝はらむ言の葉に、浅き色見えむ事をつつむのみにあらず。わづかに三十字あまりを連ぬれど、いまだ六つの姿の趣きをだに知らず、おのづから難波津の蹤をならへど、さらに出雲八雲の行方くらくのみ侍る」（『宮河歌合跋文』）という己の浅学を思い、また、「まして大和言葉の定まれる所なき心姿、いづれを悪し善しといひ、いかなるを深し浅しと思ひはかるべしとは、誰に従ひて何を実と知るべきにもあらず」（『同』）という、一定基準のない和歌についての判断の困難を思うことであつた（22）。

そういう定家に西行は、「じ、うどのへは、わざとはげみおぼしめすべし。をろをろにてさぶらはんはけうなく候ぬべし。こだれおはしまして御覽じわきたるよと、人み候ばかり判してたぶべきに候。御宝

前にてよみ申候はんにも、かみかぜなびきおはしませんずることに候」（『西行仮名消息』）などと言つて来る。

これではいよいよ筆は進まなかつたことであろう。歌合の判者たるには、歌に対する見識なり、作歌の力量なりが、相手を越えてはじめて可能なことである（23）。また、既に実情、实景に根柢をおかない象徴歌の中に、いわば詩美を目指す方向に進みはじめていた定家にとっては、実情に即して真情を吐露するていの西行の歌（24）は、彼の判詞を拒みもしたであろう。

だが、定家の筆を遅らせたものは、それだけに止つたのであろうか。元々、定家にとっては、歌の師であつたはずの西行が、何故後進の自分に自歌合の判を求めて来たのだろうか。神宮に捧げる奉納歌に、例えそれが歌合の体裁をとつていたにしても、判詞は必ずしも必要ではない。

西行の行為に、何か不自然なものを定家は感じていたのではないか。敢えて言えば、定家はそこに西行の政治的な計算をみたのではないのか。俊成は当代の歌壇の最高權威であるから判詞を乞うとしてもさもあるうということであるが、若き定家にもそれを、ということは、理解に苦しむとまでは言わないにしても、現在までのところの大家と、これから先、未来にかけての新たな世代の代表としての定家を、西行が認めたということなかもしれない。ここでも西行に根本的に内

在していたらしい政治的な睨みは利いているのである(25)と、堀田氏は言われた。

その政治的な睨みは、定家に判詞を使噓しちう(指噓)する上での駆引きとして、定家の功名心に巧みに訴えてゆくところにもよく利いているようにみえる。

「御裳濯宮河に急ぎ披露し候べしと、人(神宮の神官)も待ちいらて候よし、度々申し遣し候。神の御めぐみ疑おぼしめすべからず候。必らず急ぎてしるしおはしまさんずる事にて候」「伊勢の御かたに向ひて御神恵みおぼしめすらむと思ひやりまゐらせ候べく候。何事とは知り候はねども、御所望ごとしも叶ひおはしまさむと覚え候。歌よみども(伊勢の神官ら)の許へ、心得候て祈念しまゐらせよと申しやり候べく候」(『贈定家卿文』)という。

「神の御めぐみ疑おぼしめすべからず候」と言い、「御所望のごとき何事とは知り候はねども」と言う。その高飛車な物言いと言い、おぼめかし意味ありげな言い廻しと言い、共に若い定家の功名心を煽るに充分である。西行は、定家の望むところが「何事とは知り候はねども」と言っているが、それが、「少将任官の望み」であるということ、定家が『宮河歌合』に添えた跋文でよく分かっているのである。

定家は、こうした西行の対応に、立場を逆転させて、かえって西行にこそ、その功名心をみたのではないのか。

「その判の奥書に、ひさしく拾遺(侍従)の唐名)にてとしへぬるうらみなどをほめかしたりしに」程なく、「少将になりたれば、ひとへに御神のめぐみと思ひけり。上人も判を見て、このめぐみにかならずおもふ事かなふべしなごかたりしに、ことばもあらはになりけり」と慈円の言う、そういう事態の中で、ひそかに功名心を満たしてゆく先達のすがたに定家は拘泥したのではないか。

名の栄えを願う心、或は功名を思う心、それは静かに退いて省みる時、これ程におぞましきものはない。定家自身に、ずっと後に書くこととなる「御申文之案」なる文章がある。参議であった定家が中納言を望んで提出した申文であるが、その草案、つまり下書きを書いたのは60歳の頃と推定されている。だが彼が権中納言になったのは、71歳の一月三十日のことである。その間実に10年余、栄達を願って申文の推敲に焦慮したその歳月が、いかにおぞましいものであったか。

定家において西行は、「歌」なるものに目を開かせてくれた、その人である。法橋行遍なる人物に、「歌の道に心ざし深き事は、いつばかりよりの事にか」と尋ねられた時、定家は即座に、「若く侍りし時、西行に久しくあひ伴ひて聞きならひ侍りし」と答えている。『新古今和歌集』<sup>1548</sup>番歌の詞書に見える挿話である。この事は既に本稿の第四節で触れた。

定家の和歌開眼に与ったのは、それは、父の俊成でもなく、父の周

辺にいて当然、定家への影響も大きかった筈の和歌の俊秀たちでもなかつたのである。

そのかけがえのない師の中にみた功名心と言うべきか、或は詩人の妄執とも言うべきか、判詞を書く定家の筆は、その師のあまりにも烈しい執心の前に萎縮したのであったと言えないだろうか。

むろん西行にあつても、その執心を自省する気持がなかつた筈もない。

「華・郭公・月・雪・都て万物の興に向ひても、凡そ所有相皆是虚妄なる事、眼に遮り耳に満てり」「我又此の虚空の如くなる心の上において、種々の風情を色どると言へども、更に蹤跡なし」(「梅尾明恵上人伝記上」という)。

文治五年、時に17歳、高尾の神護寺に在つた年少の明恵に向つて語つたと伝えられている西行のこの言葉に、風雅の道の空しさを思い、それに執することの更なる虚しさを省みるころは頭である。

また、本稿の第三節で私は、西住と共に新発意の空仁を訪ねた西行の『聞書残集』の記事をあげた。その記事の終わりは次のようである。

京より手箱にときれうを入れて、中に文をこめて庵室にさし置かせたりける。返事を連歌にして遣したりける。空仁

むすびこめたる文とこそ見れ

このかへりごと、法輪へまゐりける人に付けてさし置かせけるさとくよむ言葉を人に聞かれじと

申しつぐべくもなき事なれども、空仁が優なりしことを思ひ出でてとぞ。この頃は昔のころ忘れたるらめども、歌はかはらずとぞ承る。あやまりて昔には思ひあがりてもや。

最後の二文の冒頭にある「この頃」というのは、当然、『聞書残集』の執筆された時点をさす。執筆時点はこの歌集の場合成立時点と重なるが、この歌集から、文治四年(1188)撰進の『千載和歌集』には一首も入集せず、元久二年(1205)成立の『新古今和歌集』には一首入集していることから、それは大体西行の最晩年、文治年間(1185~1189)と考えられている。

空仁はその頃生きていて、西行から見ると、「昔の心」すなわち初心は忘れていらいしが、歌は変らずすぐれていると聞いている、と

「あやまりて」以下は、空仁が忘れていた初心の「昔」は、まちがって誇りを高く持っていたのだろうか、の意である。「思ひあがる」は、現代語とちがって、よい意味なのであるが、空仁の現在、そのよき矜持を失なっていると、西行は彼のために嘆いているのである。

出家直後の空仁も、行動したのちの高揚した気分、誇り高い気持ち

にみちあふれていたにちがいない。それが長く生き続けるうちに、出家せざるを得なくなつた外的事情の方に思いを残して、初心を变质させてしまった。一度は空仁に自分の理想像を見ていた西行は、それだけに嘆息をもらさざるを得ない(26)。

これは、桑原博史氏の注解であるが、空仁の、初心を变质させて行った心の甘さ、西行はそれを咎めているのではない。「思ひあがりて」あることの至難を西行は思っているのだ。空仁評はそのまゝに己が評でもあったのである。

だが、西行の執心は、遂に彼から消えることはなかった。

定家から届いた自歌合の判詞を手にした彼は、「先づ御神の御使として嬉しと思ひ候へば、三返見候ひぬ。人に三度読ませて、おろおろ聞き候。猶ゆるぎ覚え候へば、手づから頭をもたげ候て、休む休む二日に見はて」(『贈定家卿文』)て終つた。

その終焉は文治六年の春に來た。終焉の近い夜毎に、西行の脳裡に去來したものは何であつたのだろうか。それは、勸進の旅にありながらも、なお出離の心定まらぬ漂泊の思いや、それとは裏腹の権勢や名利の世界になお逸る己が功名心への口惜しき悔恨ではなかつたのだろうか。

うなる子が鳴らす麦笛に、夏の熟寝より覚める「たはぶれ歌」の静謐が、或は、竹馬を杖に遠い日の童遊びを思い出す恬淡の時間が、も

う一度、西行に訪れることがあつたかどうか。

西行逝つて50年、彼を風雅の先達とも、師とも仰いだ芭蕉は、旅に病んでなお枯野をかけめぐる数奇への執着を隠さなかつたが、終焉の西行を捉えていたものは、かくの如くにも終わることのない己が妄執の生涯への、口惜しき慙愧の思いではなかつたのだろうか。

定家の「をはりみだれざりけるよし」に聞いた西行の死は未時に來た。

文治六年二月十六日未時、これをユリウス曆に換算すれば、1190年3

月23日の午後のことである。弘川寺の寺域に春は既にあつたが、桜樹の蕾は開くにはいまだ旬日を要した。

(完)

(注)

(1) 目崎徳衛氏『数奇と無常』(昭和六十三年十一月刊)

(2) (3) 五味文彦氏『院政期社会の研究』第四部第一章「女院と女房・侍」(昭和五十九年十一月刊)

(4) (10) (18) (19) 目崎徳衛氏『西行』(昭和五十五年三月刊)

(5) 日本古典文学大系『和漢朗詠集 梁塵秘抄』(昭和四十年一月刊)

(6) (8) (9) (11) (13) (15) (17) 石田吉貞氏『隱者の

文学』（昭和四十四年一月刊）

（7）（12）（14）日本古典文学大系『新古今和歌集』（昭和三十三年二月刊）

（16）『文学』（昭和六十一年十月刊）

（20）（21）（24）（25）堀田善衛氏『定家明月記私抄』（昭和六

十一年七月刊）

（22）（23）久保田淳氏『藤原定家』（昭和五十九年十月刊）

（26）桑原博史氏『西行とその周辺』（平成元年二月刊）



高松短期大学研究紀要

第 22 号

平成4年1月31日 印刷

平成4年1月31日 発行

編集発行 高松短期大学  
〒761-01 高松市春日町960番地

TEL (0878) 41-3255

FAX (0878) 41-7158

印刷 高東印刷株式会社  
高松市東山崎町596番地